キャンパス・コラム

しばらく前に話題になっていた『若者殺しの時代』（堀井憲一郎著、新潮新書）という本に、最近の大学生は、「単位を取った」ではなく、「単位が来た」と表現することがあるという紹介があった。ちなみにこの本の著者は本学出身者でも、また、教育関係者でもないが、この本の言うところは、80年代に若者であった者には、共感するところも多いようだ。

さて、本学で冒頭のような表現を耳にした記憶は、まだない。努力に努力を重ねて、良い成績を取得したのであれば、素直に「努力の結果、良い成績で単位を取得した」と、おおいに言ってよいのではないかと思うが、一方、勉学に限らず、汗水垂らしてもがいている状態を赤裸々に人前に出すのはいかにもカッコウが悪い、できれば、鼻歌交じりに獲得をしたようなフリをしたい、これは昔も今も変わらない若者の心理ではないかとも思う。また、他人の努力している姿を直視するのは、見る方にしてもきまりがわるいということはままある。

加えて、平均的な範疇を逸脱する個性を排除するきらいがあるという初・中等教育時の影響があってからか、大学生になって、大学生の学修は能動的に、就職も視野に入れてプレゼン能力も身につけてと、周囲から責め立てられて意識は一所懸命能動的に、でも実態はかたくなに普通（とは何かという問題はあるが）に見せようとする防衛本能が働いていると推測される学生は案外多いように思う。

勉学も、遊びも、就職も必死の形相で努力してもよいし、鼻歌交じりでカッコウをつけてもよい。その選択権は本人にある。しかし、おおかたの大人は、意識せず、大学生の年代に自分の社会人としてのスタイルの基本を決定しているのではないか。これはホームカミング・デーに参加される同窓諸氏にあうたび感じることである。

であれば、自分はどのような社会人になりたいのか、意識、無意識にかかわらず真剣に選択をしてほしい。しかし、そうは言っても、大人の言うことを聴かないのも若者の常である。自らを振り返ってもよく聴いていたとはいいがたい。関係者としては最善を尽くすが、成る可くして成るのが人生と学生を見送ってきた。そして、多くの学生たちが成る可くして成り、いつの日か一度は母校に戻ってきてほしいものだと願っている。

入学センター事務部長　宮﨑　寛

編集室

毎朝、立川南駅から多摩モノレールに乗ると、進行右側の車窓に向いて立つようにしています。楽しみにしていることがあるのです。曇天の日はともかく、雲ひとつなく空が高く澄み渡る日は、〝恋しい人〟に出会うときのように胸を踊らせます。

そうです。富士山が秀麗な姿をみせてくれるのです。遠く仰ぎ見る富士の高嶺はなんと凛々しいのでしょう。思わず背筋が伸びます。清楚な佇まいには、奥ゆかしさを感じ、心身共に洗われます。

でも富士山は晴れの日でも滅多に姿をみせてくれません。「きょうは、きっと」と期待しても、応えてくれません。美しさとは、さらけ出して見せるものではないのだろう。そう思い、自分自身に納得させています。

冬を迎え、雪化粧で一段と美しさを増した富士山が間もなく見られることでしょう。こんな楽しみがあるのも多摩キャンパスならです。

ところで今号では、卒業生向け企画として社会人学生に焦点をあててみました。「〝登板〟本学の社会人学生」で取材した3人の方はみなさんが、はじめの一歩を踏み出すことに躊躇しない行動力の持ち主でした。

学ぶのに遅いということはないでしょう。富士山との出会いを楽しみに、再び大学に通うのも一考かもしれません。**（入学企画課　伊藤博）**

学生記者が取材・編集する大学広報誌
Hakumon
Chuo ちゅうおう
2007
秋季特別号
2007年（平成19年）10月25日発行　No.203

発行　中央大学広報委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉
『Hakumonちゅうおう』編集室
☎042－674－2146

印刷　泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03－3631－8141